英国BTCVの田園景観及び森林生物環境の保全活動について

重 松 敏 則 *

BTCV's Conservation Activities for Countryside and Woodland Wildlife Habitats

Toshinori SHIGEMATSU

摘要：英国における戦後の農業生産構造の変化は、伝統的な田園景観と環境に大きな影響を及ぼした。BTCVはこれに対し、市民ぐるみの保全活動を進めるために設立されたトラストで、政府や企業の助成と、他の自然保護団体等の協力を得て、大きな実績を示している。本研究は我国で知られていないBTCVの組織・運営を紹介するとともに、その現場活動の事例として、薪炭林の密生化による生物相食化防止のための森林管理について報告する。

1. はじめに

英国における自然保護運動といえば、1895年に設立され95年の歴史を有するナショナル・トラストが、よく知られている。その運動の柱は、歴史的遺産や自然景観地を所有することによって、これらを確実に保全することであるが、一方、このような財産の保有は目的とせず、もっぱら現場での実際的な保全活動を運動の柱にしているのが、BTCV (British Trust for Conservation Volunteers) である。1959年に活動を開始したこの団体は、ナショナル・トラストに比較してその歴史は浅いが、組織の発展と活動実績はめざましく、英国内における自然保護運動体として、今や不可欠な存在となっている。¹⁾

従来、我国での自然保護運動の伸び悩みと組織的発展の低迷が指摘されているが、以上のような英国の実状をみるにつけ、その差異は何に起因するのか疑問に感じる場所である。筆者は先に、我国での市民参加による里山林の保全・管理活動について、その意欲と作業能力の把握を試み、大いに発展性のあることを報告した。²⁾ しかし、その成否は今後の組織・運営と活動戦略のいかんにかかわっており、BTCVに学ぶべきところは大きい。

幸いにもこの度その活動の一環に参加し、森林での保全活動の実態を体験することができた。本論は、このような現場体験と資料に基づき、我国ではあまり知られていない、BTCVの機構と活動状況について報告し、我国の今後の自然保護運動体の組織・活動の発展に役立てようとするものである。本論をまとめるに当たり、資料、情報の提供をいただいた、ロンドン大学ワイ・カレッジのDr.G.P.Buckley, Hamstreet Woods国立自然保護区

レインジャーの Mr.R.Petley-Jones, BTCV ボランティア・リーダーの Mr.Barry O'Dowd, 日本大学農獣医学部の高橋理喜男教授に謝意を表する次第である。

2. BTCVの機構と活動

(1) 設立とその背景

BTCVは、森林・田園地域および都市地域における、市民ぐるみの環境保全活動の促進を目的に設立されたものである。その前身は民間団体の自然評議会 (Council for Nature) のもとで1959年に生まれた、市民による自然保護隊 (the Conservation Corps) で、これを母体にさらに活動の拡大発展を図るため、1970年にあらためてBTCVとして発足したものである。その設立の背景には、1950年頃より英国で生じた急激な都市化の進展と農業構造の変化によって、田園景観および自然環境が著しく変質するという問題があった。

英国の伝統的な田園景観は、緩やかな起伏の牧野の広がり、これをモザイク状に区切る生け垣、または石垣によって特徴づけられる (写真-1)。これは16~17世紀に、英国における羊毛産業の興隆にともなって生じた、第1次の農地の囲い込み (Enclosure) の遺産である。その結果、多くの小農が農地を失うという悲哀がある一方、これらの生け垣や石垣は田園景観の質を高め、野生生物の「隠れが」や生息場所としても重要な役割を果たすに至った。それは、西暦1世紀前後のローマ人の侵入以後、英国の森林は牧野化が進み、国土面積の10%以下となっていたため、特に生け垣は重要な環境要素となったからである。また牧野化されたとはいえ、かつての粗放

*大阪府立大学農学部

的な牧畜経営は多様な野生草花の生育を可能にし、各種の昆虫や鳥類、小動物の共生を許容した。

しかし、戦後の農業の機械化は、土地を細かく区切るこれらの生け垣や石垣を邪魔なものとし、より能率的な農業経営のために、その撤去が大幅に進められた(写真-2)。そして、自然に再生してくる多様な草に依存する、従来の粗放的な牧畜経営から、耕耘によるより生産性の高い単一牧草栽培、さらには畑地化によるムギ、テンサイ、トウモロコシなどの単一農作物の栽培が進められた。これに、化学肥料、農薬、除草剤の普及が加わり、自然環境に大きな影響をもたらしたのである。³⁾

(2) 組織の発展と財政

BTCVは税法上の特典をうけるチャリティ団体として、公式に認定されており、Oxford県の Wallingford に全国本部を置いている。ボランティア活動を組織するために、1990年現在、全国に75の地方事務所を開設しており、さらに629の地域保全グループ(Local Group)が加盟している。BTCVとして発足後、ほぼ10年経過した1982年の地方事務所数が28、地域保全グループ数が314であるから、目覚ましい発展を遂げてきたことがわかる。

BTCVは活動と資金源の幅を広げることを目的に、1985年に設立した5つの子会社(Trading subsidiary)を擁しており、これらは環境保全事業の請負いと共に、青少年や失業者に保全技術と就業訓練の場を提供する役割も果たしている。ほかに環境商品の製作・販売も行っている。1990年現在のBTCVの雇用職員数は207人で、子会社のそれは152人(1989年は512人)である。¹⁾

表-1に示すBTCVの1989、1990年度の財政収入の内訳をみると、年間収入の75%前後が助成金と寄付によるもので、そのうち中央政府がほぼ40%、地方自治体等が20%弱、また民間企業や財団および個人は18~40%となっている。会員からの会費収入は、両年度とも全体の2%に満たない。なお、中央政府は失業対策や職業訓練の一環を担う子会社に対しても、組織育成のための財政支援を行っており、1989年度は11億4,000万円に達する。ただし、この年度で5年間にわたる支援期間が終了したため、1990年度は5億6,500万円にとどまり、これに伴い子会社の雇用職員数も急激に減少している。

(3) 活動内容とシステム

60年代の自然保護隊の活動目標は、①田園地域における伝統的景観の維持を支援、②会員に対する自然保護の原理と実践の訓練、教育、③自然保護区や、その他の学術的に重要な場所の維持・管理を支援、であったが、これらの目標は現在もBTCVが担っている。その後、活動範囲は田園地域における教育やアメニティにまで広げられ、さらに80年代に入って、都市地域で実施される活動の総量が増加している。1990年現在のBTCVの活動は、大きく以下の4つに区分される。

写真-1 牧野、畑、生垣、林地が織りなす伝統的な田園景観

Photo.1 The typical British countryside composed of pasture, arable and woodlands.

写真-2 機械化により生垣が失われ貧化する田園景観
Photo.2 Open landscape losing hedge due to the agricultural revolution.

表-1 BTCVの財政収入に占める助成金と寄付^{*)}
Table 1 Grants and donations in BTCV's financial income

	1989年	1990年
中央政府及び国立機関	310,889 (28.7)	312,842 (29.4)
地方自治体など	131,204 (12.1)	142,910 (13.5)
財団、企業、個人	236,757 (21.9)	312,319 (29.4)
その他の助成と寄付	147,635 (13.6)	4,049 (0.4)
小計	826,485 (76.3)	772,120 (72.7)
助成・寄付以外の収入	256,277 (23.7)	290,009 (27.3)
合計	1082,763 (100.0)	1062,129 (100.0)

単位:千円 ()内は全収入に対する割合(%) £1=240円で計算。

i. 週間保全合宿 Natural Break conservation working holidays

全国組織が周年にわたり実施する1週間単位の保全作業合宿(以後Natural Breakと言う)で、参加資格は16~70才の年齢層である。国外からの参加は18才以上に制限される。参加希望者はBTCVが年2回発行する、活動計画の冊子を請求し(会員には定期郵送される)、その中から自分の希望する作業内容、期日、場所のプロジェクト(表-2、3)を選んで予約しておく。予約には申込み金£5(約1,200円)が必要で、確定した時点で申込み金を差引いた参加費を納入する。参加費には合宿中の宿泊や食事(自炊)が含まれ、その額は主に宿泊所の条件により£12~54まで、プロジェクトにより巾があるが、70%が£25~30(6千~7千円)の範囲である。なお、失業者が参加する場合は、申請すれば手当が支給される。

未知の人とのコミュニケーションづくりと連帯が、BTCV活動の目的の一つでもあるため、友人同士の申込みは2人に制限される。1プロジェクトの構成人数はボランティア・リーダーを含め原則として12人で、年齢や経験の異なる人々で一団が編成される。1990年度には全国で534のプロジェクトが計画・実施され、約5,500人が参加している。参考として図-1に作業の内訳を示す。

ii. 週末保全活動 Weekend Conservation Break

全国組織が統括する Natural Break の計画と実施に、地方事務所は大きな役割を果たすが、それ以外に地方事務所と地域保全グループは、日帰りの保全活動を週末に実施している。活動内容は Natural Break とほぼ同様であるが、都市部、地方などの差異によって当然個々の地域特性や課題が反映される。

地域的な週末活動の日程と場所、作業内容は、それぞれの地域や地区の会員を対象に通知され、別途に会費や参加費は徴収されない。なお、地域活動は無職の人、恩給生活者、日曜が休みでない勤務者のために、平日にも用意(Midweek Break)されている。このような地域活動は、できるだけ多くの人々に保全活動への参加の機会を提供するという理念に基づいている。さらにBTCVは、地域のコミュニティこそがその土地の問題点や何が必要かをよく知っており、解決の担い手として最もふさわしいことを認識しているからである。従って、積極的にスタッフを派遣し、地域グループが補助金、アドバイス、現場指導等の支援が受けられるよう手配する。

週末及び平日の保全活動についての統計資料が得られなかったが、1990年度の Natural Break を含むBTCVの活動への参加者数は、約60,000人と報告されていることから、その動員量の大きさが推し量れよう。

iii. 保全技術訓練 Training for Conservation

田園景観ならびに野生生物環境の保全・復元に必要な技術の習得、ならびに技術向上を目的に実施される訓練

図-1 BTCV保全合宿における活動量の内訳¹⁾

Fig.1 The proportion of different type of conservation work carried out on Natural Breaks

コースである。Natural Break や Weekend Break を指導・統率するボランティア・リーダーを養成する役割も果たし、規定の課目数を習得するとともに、現場活動の経験を積むと、リーダー(field officer)として認定される。訓練課目の内訳は、表-4の通りである。訓練の日程は課目やコースによって異なり、日帰り、2, 3日の合宿とがある。参加費用も1日当たり£10~35 (2,400~8,400円)と巾があり、中には無料のコースもある。なお、BTCV会員とボランティアは、50%までの割引きが

表-2 BTCVの保全合宿で行われる主要作業項目¹⁾
Table 2 Projects in Natural Break conservation working holidays

1. 森林管理:
針葉樹植林の伐採・間伐と在来落葉広葉樹種の植栽。 過熟薪炭林での伐採・間伐、下刈りによる管理サイクルの再開。 燐化樹木(シカモア、シャクナゲなど)の除伐と在来樹種の植栽。 林間空地(glade)や林道沿いの伐間と林内歩道の維持管理。 放牧畜の侵入防止のための石垣、生垣、フェンスの維持管理。 伐採・間伐木のクラフト材としての選別とクラフトづくり。
2. 田園地域へのアクセスの整備と景観保全:
自然歩道(footpath)の開設と、小橋、木道、階段などの設置。 自然歩道網の改善のための道標やベンチ・野花草などの設置。 歩道沿いの刈取り、植樹、ならびに石垣や生垣の復元と維持。 敷石による路面の舗装や排水溝の改修による浸食の防止。 牧場や耕作地の境界垣を通過するための踏み越え段の設置。
3. 野生生物の生息環境の保全:
土手に生えてくる低木の刈取り、湿地でのアシやスゲの刈取り。 池の浚渫、ならびに湿性・水生植物の植付けによる湿原の復元。 ヒースや草地に侵入してくるシラカバ、マツ、低木類の除伐。 ヒースの火入れやワラビの刈取り及び腐植の除去による維持。 湿原や生息地保護のための木道やフェンスの設置。 多様な在来樹種をミックスした生垣の設置。 (森林と海岸については1、4と重複するので省略。)
4. 海岸景観の保全:
侵入低木の刈取りによる砂丘の維持・回復と砂丘植生の再生。 橋、生垣、石垣の復元・管理による飛砂の防止と砂丘の安定化。 引き舟道の維持管理。(1、2と重複するものは省略。)
5. 歴史的遺産の保全と教育:
歴史的な遺跡や邸宅の庭園、農場などの維持・管理。 保全作業に農芸、実習、見学などが組み合わされる。

表-3 BTCVの保全合宿一案内冊子の説明例¹⁾
Table 3 One information from a booklet of Natural Break conservation working holidays

419* アッシュワース・バレー、サウスペニーズ			
11月 2~9日**			
サウスペニー・バレー地域では、長年月にわたる羊の過放牧によって、森林が失われていますが、その一つに、ロチデイル北部のペニー山地に接するアッシュワース地区があります。このプロジェクトの目標は、北西地方水道局に協力して、まず羊の侵入防止のためのフェンスを設置し、ついで植樹を行うことにより、風土に合った森林を回復することです。このプロジェクトに参加して、本物のランカシア・スタイルでの火祭の夕べを祝いませんか。参加者のうち、2~3人は杭の打ち込みと、ワイヤー張りの経験が必要です。			
2****			
宿 舎	4★Bm***	£30.00	*****
集合場所	ロチデイル駅 隣	6.00pm	

(筆者注) *プロジェクトNo. **実施期間
***宿舎の設備(シャワーやベッドの有無により5段階)
****体力必要度(5段階) *****参加費

ある。宿泊を伴うコースでは、Natural Break の場合も同様だが、仕事着、雨具のほかに、寝袋の持参が必要で、食料は用意されるが、参加者が分担して自炊する。

1990年度には全国で456の訓練コースが実施され、約5,000人余りが参加している。^{1,5)}

(4) 活動の連携と支援

BTCVは、環境省に所属する田園地域委員会 Countryside Commission や、自然保護会議 Nature Conservancy Council のような政府機関、各地の地方自治体、さらにナショナル・トラストや森林トラスト、王立鳥類保護連盟など、他の多くの自然保護団体とも密接に連携して活動している。民間企業や企業設立の財団からの寄付や助成も、BTCV活動の強力な後ろ盾となっており、それは表-1に示す助成収入の内容にも反映されている。

例えば、田園景観・環境の保全と市民のためのアクセスの確保は、田園地域委員会の主要な所轄業務であるが、表-2に示す活動内容からも分かるように、BTCVは過去40年間のうちに失われてきた総延長9,650kmの石垣と175,400kmの生垣の復元、さらに英国民共有の貴重なレクリエーションの財産である総延長225,300kmのフットパス(Public Footpath)の維持管理について、重要な一翼を担っているのである。

近年、BTCVは3つのキャンペーンを展開し、官民の保全活動への参加促進とパートナーシップづくりを進めている。クレジット・カード会社の支援で行う「2週間のフットパス整備運動 Access Footpath Fortnight」、地域のコミュニティ活動の起動を目的に、田園地域委員会及びパークレイ銀行と連携した「2週間の保全・コミュニティ運動 Communities in Conservation Fortnight」、1987年に英国を襲ったハリケーンによる多大な樹木の損失と景観被害を契機に、エッソ石油と田園地域委員会の支援のもとに1988年10月に開始された、3年間の「百万本の植樹運動 Million Tree Campaign」がそれである。後者の場合、1990年3月までに約45,000人の参加により、既に75万本の植樹が達成されている。

以上はBTCVの連携活動や、BTCVに対する多数の支援の中の数例を示したに過ぎない。企業による支援には資金援助のほかに、1～数年間にわたる専門職員の派遣等もあるが、紙数の制約から詳しい紹介は割愛する。

なお、BTCVの活動は近隣諸国にも波及しており、1988年にはEC本部が欧州各国で国際的な保全活動(International Working Holiday)を開設するための準備として、BTCVにこれに携わる専属職員を雇用するための資金を提供している。

(5) 教育・啓発活動

BTCVは現場で保全活動を行うと共に、環境に対する認識を啓発する役割をも果している。その活動は青少年や学生に広く知られており、Natural BreakやWeekend

表-4 BTCV訓練コースの内容(南東地区版による)⁵⁾
Table 4 BTCV conservation training scheme in South East region

森林の生態・調査・管理: ①樹木の識別(冬季・夏季) ②キノコの識別 ③森林生態と調査 ④森林生物環境アセス ⑤森林管理計画 ⑦森林保全 ⑧森林哺乳動物の保全・調査
伐採・植樹: ①伐採技術 ②チェーンソー操作(1~3) ③ウインチ操作 ④苗木の植付け ⑤植付け後の育成
薪炭林の管理・クラフト: ①薪炭林の伐採管理 ②薪炭材によるクラフト
池と湿地: ①自然教育のための池 ②湿地の自然と保全 ③池の動植物 ④湖沼の観察 ⑤野生生物のための入江管理 ④池の造成・復元 ⑤水位の管理 ⑥池の生態と管理
放牧地とヒース原野: ①チョーク丘陵草地の管理 ②ヒース原野環境アセス ③放牧地環境アセス ④ヒース 原野の管理 ⑤イネ科草原の管理 ⑥低木刈取り機の操作
フットパス: ①フットパスの開設 ②生垣の復元と保全 ③橋の建設 ④階段工と舗装 ⑤通過扉と踏み越し段の設置
境界工: ①フェンス工(杭打ちとワイヤー張り) ②石積み工 ③生垣伏せ込み・刈込み工
活動運営・リーダーシップ: ①リーダーになるには ②リーダーシップ(衝突と調整) ③コミュニティの結成法 ④現地調査 ⑤運営計画 ⑥グループ指導 ⑦救急(1・2) ⑧道具の保守と修理 ⑨編集と出版
その他: ①都市自然の管理 ②都市緑化 ③校庭での保全 ④農業と野生生物 ⑤野生生物のための建築 ⑥環境保全政策
(1990年度) 一部は省略し、重複分も除く。全144コース

Break 等への参加体験を通して、自然環境や野生生物に対する認識を高めている。多くの地域保全グループが、個人的な参加体験をきっかけに形成されているのである。

1977年以来、BTCVは学校とも連携して、校庭でのタメ池づくりや生態園づくりなど、実践的な保全・教育活動に取り組み、さらに授業の中に環境教育を取り入れたいと望む教員のために、支援とアドバイスを行っている。1990年現在 620余りの学校がBTCVに加盟し、同年度中に約 57,000人の生徒が実践活動を体験している。

BTCVの出版物は、現場での保全活動の遂行上必要となる基本的な手法や知識の提供を目的にした、一連の「森林」「生垣」「湿地」などの技術書から、学校教員用の「環境教育パック」、一般市民用の各種パンフレット、会員向けの季刊新聞まで多様である。いずれもその対象や場面において保全活動が促進し、あるいは野生生物や環境問題に対する理解が深まるよう工夫されている。

3. Natural Breakによる森林生物環境の保全

(1) 活動事例地の概要

筆者が実状把握を目的に参加した事例地は、英国南部にある国立自然保護地 Ham Street Woods である。自然保護会議が1953年に買収した面積96.9haのこの森林保護地にはレンジャーが配属され、管理及び利用者の指導を行っている。古い記録はないが生態学的調査により、この保護地のミズナラの高木林は、少なくとも中世頃か

ら存続する往古林(Ancient Forest)と認定されている。

この保護地の主な設置目的は、以下の3つである。

①以前から生息する昆虫相の維持のために、良好な生息環境を用意する。②薪炭・用材複合経営 Coppice-with-Standardのシステムを伝統的方法で保持し、良好な見本林とする。③多様な森林条件を用意することにより、動植物相の多様性を高める。

以上の目的から、薪炭林 Coppice の定期的な伐採更新は、この保護地の重要な管理項目となっている。ただし、1987年のハリケーンにより1,500本以上の倒木被害があって以来、新たに人為を加えない区域が設けられ、追跡調査が行われるようになった。また、この保護地は、多様なレベルの科学研究の場を提供すると同時に、アメニティの場としても重要な役割を果たしている。

(2) 宿泊施設と参加者の属性

参加登録者は初日の夕方に通知された最寄りの鉄道駅に集合すると、BTCV所有の小型バスに迎えられ、宿泊場所に搬送される。各プロジェクト実施地域の実状により宿泊場所には5階級があり、本事例ではBurmarshという小村の木造の集会所で、階級は2である。この場合、床にマットを敷き寝袋で寝るもので、シャワーも近隣の協力民家で借用するというものであった。なお、食事はBTCV地方スタッフ（多くがボランティア）により予め用意されたものを、各々が分担自炊する。宿泊施設はパブに近い場所が選定されるよう配慮されており、初日の夕食づくりと食後のパブでの歓談により、早くも親交が高まるシステムになっている。

参加者の属性を表-5に示すが、時期が大学等の休期中でないため、中途参加者を除き社会人のみであった。

(4) 活動スケジュール

起床は午前7時30分頃、早起きの人が洗面やお茶の準備をしますことで始まる。朝食はパンとバター、牛乳程度で、起きだした者から各自で済まし、早く済ませた者

が昼食用のサンドイッチを作る。一定の活動の時間的決まりはあるが強制することではなく、あくまで参加者の自主性に待つやり方である。8時半過ぎに小型バスで出発し、9時頃に保護地の作業現場に到着する。9時～17時までが作業時間で、途中に約1時間の昼食時間と、午前と午後にそれぞれ30分程度ずつのお茶の時間がある。

夕食は質素ではあるが、肉類や果物なども入り、用意されたメニューに従って自炊する。参加者に菜食主義者がいる場合は（本事例では3人）、同じメニューで肉類を抜いたものが別に用意される。夕食後には、ほぼ毎日パブにでかけて夜遅くまで歓談し、就寝は24時過ぎになることが多かった。宿舎に残って読書したり、早めに就寝する者もあったが、特に違和感はなく、参加者相互の連帯感の一つであった。なお、合宿後半に1日の休日があり、近辺の歴史的な町に遠足に出かけた。これとは別にレンジャーによる半日の保護地内の案内と解説や、リーダーによる夕食後のスライド会もあり、合宿中にも変化があるように考慮されたスケジュールであった。

(5) 作業内容と実績

本事例での作業の中心はハシバミ林とクリ林の伐採で、目的は放置された薪炭林の管理サイクルを復活することにより林内に陽光を入れ、多様な野生草花類や昆虫類の生息環境を用意することである。ハシバミ林では、高木 Standard のミズナラとシラカバも伐採した。高木の樹幹を除き、伐採木の幹や枝は総て林内の一かくで焼却処分されたが、これは少量のため商業ベースにのらないことと、林床のマルチを避けて植生回復を図るためである。なお、保護地内の別の薪炭林では、請負業者による伐採が行われていた。これらは杭やフェンス、暖炉用材として市場に出される。ハシバミの切り株については、若芽がノウサギに食害されないよう、枝で保護する作業があった。さらにクリの伐採跡地では、林種転換を目的にハシバミ苗木の植栽作業があった。これは、クリが高生産性の故に、18世紀に南フランスから導入され、以後、英国の薪炭林の中心になったが、自然保護地では、近年これを伝統的なハシバミやブナに戻す方針になったことによる。

実働 4.5日間の作業実績は、薪炭林の伐採面積（伐採木の搬出と焼却、切株の保護作業を含む）が約550㎡、樹高約15mのミズナラ及びシラカバの伐採が7本（後処理を含む）、そして苗木植栽が900本であった。

4. おわりに

英国における戦前までの自然保護運動の主流は、景勝地や歴史的遺跡・建築物の保護、あるいは希少動植物とその生活地の保護を目的にした。これに対し、1959年に発足したBTCVの特徴は、伝統的とはいえ郊外に出れば一面に広がる「ごくありふれた田園景観」の保全と、

表-5 参加者の属性

Table 5 Profiles of the participants

リーダー（27歳・男）：コンピューター・アナリスト。リーダーとして、年に6～7回参加。	
サブ・リーダー（32歳・男）：自動車運転教師。BTCV長期ボランティア。リーダーを目標に経験蓄積中。	
一般参加者	
42歳・男：地方自治体のソーシャル・ワーカー。	
24歳・女：現在無職。ボランティアのアザラン救護員。	
23歳・男：雑誌社への写真配給会社職員。夜間は非常勤講師。	
35歳・男：職業不明。BTCVのチェンソー免許所持。	
33歳・男：地方自治体の住宅局員。	
34歳・男：事務職員。	23歳・男：郵便局員。
32歳・男：現在無職。	45歳・男：筆者。
中途参加者（土曜・日曜を含む3～4日間）	
24歳・女：大学生で、BTCV長期ボランティア登録者。	
27歳・男：大学生	22歳・女：大学生 24歳・男：大学生

そこに共存する「特に珍しくもない野生生物」の保護を、活動の目的としたことである。また、運動の担い手や形態も従来型の貴族・ブルジョワ階級による寄付活動から、その主体が一般市民による実践活動、ならびに人材の養成にかわった点も見逃せない。さらに、従来の自然保護運動は開発者である企業や行政と敵対し、その寄付や助成を邪道と考えてきたが、BTCVは積極的にその支援と協力を取りつけたことも、大きな特徴である。

石炭を燃料とする工業化の時代の局地的な環境問題とは異なり、戦後の石油エネルギー時代の始まりは、工業はもとより、農業の生産構造や市民のライフスタイルも表裏一体となったグローバルな環境問題をもたらした。その解決には企業はもちろん、一人一人の国民の認識と協力が不可欠である。このような大きな課題に対し、行政施策に市民参加を連携させ、企業の支援をも含めたパートナーシップで人類共通の、否、生類共通の目標に取り組むBTCVの活動手法は、まさに時代の要請を反映したものだと言える。同様な問題をかかえる我国において

も、今後の組織づくりが期待されるところである。⁷⁾

引用・参考文献

- 1) BTCV (1989): Protecting the Environment 1959-89, 1-5, BTCV Head Office
- 2) 重松敏則 (1990): 里山林の保全・管理に対する市民の参加意欲について, 農村計画学会誌 9(1), 6-22
- 3) G.P. Buckley (1989): Biological Habitat Reconstruction, 81-91, Belhaven Press
- 4) BTCV(1990): Natural Break-conservation working holidays・summer'90, BTCV H.O.(冊子)
- 5) BTCV (1990): Training for Conservation - South East Training Programme 1990, BTCV H.O. (冊子)
- 6) BTCV (1990): Reports & Accounts for the year ended, BTCV H.O. (冊子)
- 7) 重松敏則 (1991): 市民による里山の保全・管理, 1-71, 信山社サイテック

Summary : The postwar agricultural revolution and increasing urbanization have together much influenced the British countryside, with major impacts upon traditional landscapes and wildlife habitats. Within this context, the Trust (BTCV: the early name is the conservation corps) was formed in 1959 in order to involve volunteers in practical conservation work. The aim of this article is to introduce this well-organised body and its activities to Japan, which has been suffering from similar environmental problems.

1. The organization, finance and activities

It employs 207 staff, and organizes 75 field bases and 629 local conservation groups which make up the volunteer force. BTCV's operation and work is assisted by central government and local authorities. Furthermore, BTCV has close working links with the park authorities, the Nature Conservancy Council, the Countryside Commission, and also other conservation bodies, including the Woodland Trust and the National Trust. They have provided both projects and financial support, as well as funds donated by private companies. In fact, majority of BTCV's income is covered by grant or donation from central government (30% in 1990), local and statutory authorities (13%) and other Trust and industry (29%). BTCV's Natural Break programme of conservation working holidays provides volunteers various practical opportunities such as woodland management, dry stone walling, hedge management, footpath improvement, habitat protection, etc., annually in over 500 sites.

2. Case study of the activities in woodland habitat restoration

To assess the BTCV's conservation working holidays, the author participated in a coppice management course for habitat restoration on a National Nature Reserve. Since coppice management has been overthrown by the spread of oil and gas as fuel, wildflowers and other wildlife have been stunted by the over-growth coppice. With the volunteers staying in the nearby village hall, the weekly work was coordinated by a trained volunteer leader in friendly manner. Not only was the work effective for conservation, but it also promoted a wider environmental understanding, and a partnership and friendship between participants.